

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

オフ会の蜜と罠

著者	田中 研之輔
出版者	法政大学キャリアデザイン学部
雑誌名	法政大学キャリアデザイン学部紀要
巻	10
ページ	109-130
発行年	2013-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/8012

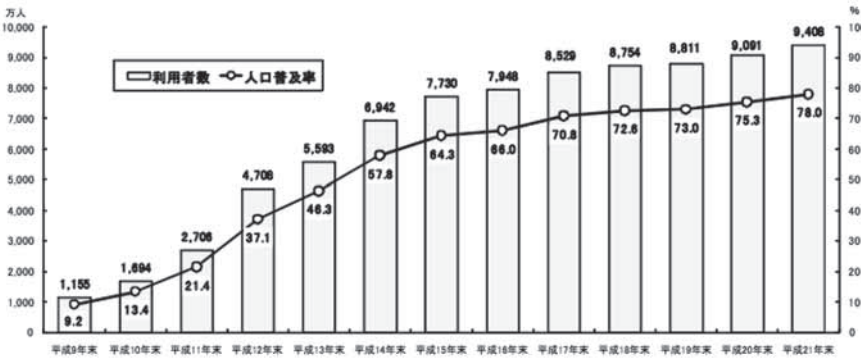
オフ会の蜜と罠

法政大学キャリアデザイン学部 准教授 田中研之輔

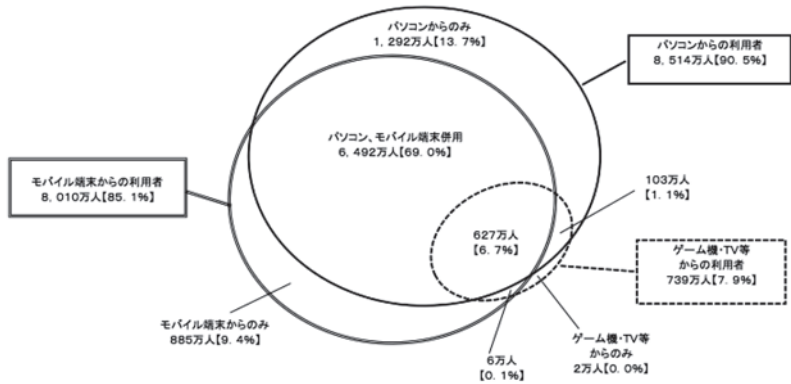
1. <オンライン>コミュニティの形成

共通の趣味や関心を持つ他者がインターネット上で出会い、コミュニティを形成する。新たな集団を形成する場として、インターネットは今や学校、職場、地域を凌駕するほどの「出会いの機会」を提供しているといっても過言ではない。総務省が行った平成21年「通信利用動向調査」の結果によると、過去一年間のインターネット利用者は、推計で9408万人、普及率は78.0%と年々増加傾向にある（総務省『平成21年通信利用動向調査』平成22年4月27日）。過去10数年の間で利用者数と普及率ともに劇的に増加している。

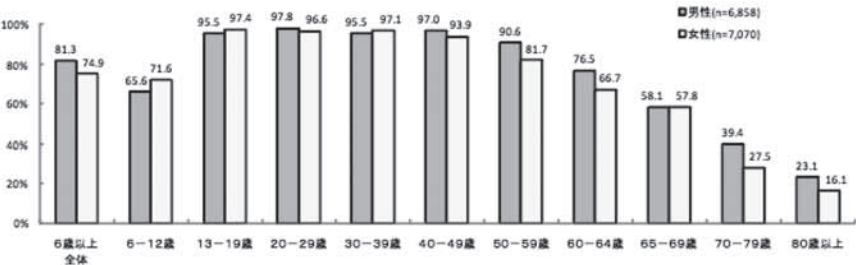
平成21年末のインターネット利用端末の種類は、下図のとおりであり、モバイル端末からの利用者が近年増加傾向にあることが確認されている。



出典：「インターネット利用端末の種類」総務省『平成21年通信利用動向調査』平成22年4月27日



出典：「インターネット利用端末の種類」総務省『平成21年通信利用動向調査』平成22年4月27日



出典：http://www.soumu.go.jp/main_content/000064217.pdf

こうしたデジタルコミュニケーションを支えている背景の一つに、モバイルテクノロジーの劇的な進歩がある。

その代表格である携帯電話の利用により、個人は移動しながら電話やインターネットに接続することが可能となっている。とくに、携帯電話所有の世代別比率をみていくと、最も普及率が高いのは20歳から29歳の若年男性で97.8%であり、13歳から50歳以下までの男女の所有率は90%を越えている。この「いつでもどこでもアクセスできるネット環境」の常態化が、＜新たなつながり＞をもたらしている。

けれども、オンライン空間の肥大化の一方で、若者たちにとって近年の現実世界はますます厳しいものになってきている。未曾有の就職難や不安定な雇用環境等、社会的に周縁や貧困へと追い込まれる者たちが後を絶たない。組織に

帰属することなく、生きていく、生かされていく。分断された社会関係の中で、つながりはどう担保されるのか。インターネットのオンラインコミュニティは、新たなつながりの機会を提供している。だが、それが若年層のコミュニケーションにどのような影響を与えているのだろうか。

本論文は、このような現実社会のありようを、インターネット空間でのつながりやオフ会を素材に検討していく。具体的には、2011年9月に2535万人のユーザーを抱えるソーシャル・ネットワーキング サービス『mixi』内に形成された、ひとつのコミュニティを対象とする。

2. オフ会へのイニシエーション

mixi は、「ソーシャルグラフ（実際の友人・知人とのつながり）」の価値と可能性を信じ、「全ての人に心地の良いつながりを提供する」ことをミッションとして、2004年2月にサービスが開始された。近年では、つぶやき（mixi ボイス）、mixi フォト、mixi カレンダーなどのコミュニケーション機能の提供や既存のサービスの機能改善、急速に普及が進むスマートフォンから mixi を利用しやすいよう、mixi Touch（ブラウザの最適化）や公式 iPhone アプリ、Android アプリなどが公開されてきている。また、ユーザーが、様々な場面において、心地の良いつながりを軸とした新しいコミュニケーション体験を得られるよう、mixi 社の持つソーシャルグラフと、パートナーの皆様が提供するサービスとの連携を進めてきている。

その一環として、2010年には mixi Connect（mixi Plugin、mixi Graph API）をパートナーに公開し、友人・知人と興味・関心を持った情報を簡単に共有できる「mixi チェック」や「イイネ！ボタン」の提供を開始している。これにより、ユーザーは、mixi 以外の Web サイトや、情報端末、家電などにおいても、友人・知人と、より楽しく便利にコミュニケーションすることが可能となっている（出典：<http://mixi.jp/>を参照）。

本論文の調査は、2010年度 Tokyography Project の一環としてフィールドワークを行った共同研究の成果である。調査は2008年7月に mixi 上にコミュニティが形成されたときから、調査者である中村彩乃氏が一員としてコミュニティの活動に参加し、フィールドワークを行ってきた。本論文では、

mixi 上で出会い結婚までに至ったカップルと婚約済みのカップル 2 組にインタビュー調査を行った。その後、中村氏の調査結果をもとに、筆者が改めて分析し、加筆修正を行った。ただし、事例部分は、中村の解釈をできるだけ、反映させるように分析をすすめてある。それでは、出会いの場としての mixi と、その後のコミュニティの動向について丁寧にみていくことにしたい。

形成されたコミュニティは某女性ボーカル歌手のファンによる「巨大コピーバンドのイベント立ち上げコミュニティ」である。コミュニティは、メンバーなしの状態から、メンバーを募集し、企画を行うイベント主催を活動の中心とするコミュニティで、その主な活動に某女性歌手のコピーバンドで生ライブを行っている。バンドは、ギター、ベース、ドラム、キーボードを担当する 4 名で構成され、3 組が結成された。結成されたバンドでイベントは二回行われ、一回目は全員が男性のみ、二回目は二名の女性がバンドメンバーの一員として参加した。初めは mixi からコミュニティに個々で参加し、そこからメンバーを結成した。

ボーカルは一回目が15名、二回目が17名集まった。一回目と二回目の両方を参加したのが9名いる。一回目に関しては1名男性のボーカル希望者がいたが、当日キャンセルされた。結果、全イベントにおけるボーカルは全て女性であった。当日歌う曲目であるセットリストが決まっており、女性はその曲目に立候補する形で参加した。そして割り当てられたバンドと共に参加に歌唱する形式がとられた。イベント当日までの練習は、多く参加した人で2回である。イベントは池袋で開催されるため、地方参加者は当日のみの参加という人もいた。東京在住の参加者の中にも当日のみの参加の人もいた。個人的に何らかの企画委員に所属していた人は、打ち合わせ等も事前に行われていた。全体の連絡としては、mixi サーバーを経由して行われるメッセージのやり取り機能を使用した。

この段階から個人的に仲良くなった、人とのやり取りを直接メールで行うようになった。メールや携帯番号を教えるか否かはメッセのやり取りに基づくといいたいところなのだが、実際には“同じイベントを行う仲間”という共通意識があり、基本的には、そうした連絡は断わることがなかった。このことについて、調査者は、「この微妙な人間心理が mixi では大きく影響する場合は多

い。」と述べている。

イベントではボーカル志望の子が一人一曲ずつ歌って交代していく。約5曲でそのバックバンドも交代する。そしてイベントの参加者が、某女性歌手に一番そっくりな女の子に投票をしていく。ステージメンバーに投票権はない。一位から三位まで順位を付け、三位から発表して受賞記念商品を授与。一回目は優勝すると約一万二千円相当のディズニーランドのペアチケット、二回目はイベントの規模拡大に伴い約三万円相当、お台場の夜景をヘリコプターからみるペアチケットや東京湾の豪華ディナークルーズのペアチケットなどが提供された。

インタビューの対象としたのは、一組目が2009年11月に入籍した平岡武と平岡由比。二組目は、交際歴2年半、同棲歴約一年8ヶ月で婚約済みの竹岡昭徳と長沢友美。三組目は、このイベントを通じて交際をはじめて、7ヶ月を経過した山下泰治と村田和美。個人のプライバシーに配慮し、上記名前はすべて仮名である。竹岡昭徳以外は全員イベントの参加者で女性人は全員ボーカルとして参加。男性二人はベースとして参加。全員とはイベントを通じて知り合いになる。平岡武はイベントの主催者である。

男女関係なく集まり集団を形成する。その中で、恋愛関係に発展したり、纏れたりするのもありがちなことだ。現実世界で付き合い出したのは、山下と村田の二人。コミュニティに参加した時点で、後に結婚することになる平岡の二人と、竹岡と長沢は恋人関係にあった。その mixi 上でのやりとりに興味を持った。

リアルの世界で会うオフ会までのやりとりの過程をつぶさにおいかけた。某女性歌手は男性にも女性にも支持が厚い。尚且つ、長期の調査に渡ることが見込まれた為、調査者自身が積極的に参加でき、対等に会話が出来る“好き”な歌手を選択した。相手との距離を縮めるには、感情や趣味の共有が一番手っ取り早い。このことと運よく新たなコミュニティが形成されたことから参加した。

調査者は、一回目と二回目共にボーカルとして参加した。一回目のイベントの際には、司会を依頼され、他の二人と一緒に司会を行った。その延長で二回目のイベントでは司会の責任者として任せられる。引き継いで司会をしたのは

調査者のみであった。二回目に関しては、司会を5人に増やして行った。イベントに関しては、二回目のイベントで優勝し、約三万円相当の商品を獲得した。二回目のイベントは、同票で二名の優勝だったのだが、それぞれが約三万円相当の商品を獲得した。ライブハウスのハコの大きさは110名程度で、ステージ参加者も含めて約100名程度の人々が一同に楽しんだ。

3. 関係性の構築

そもそも SNS サイトにおける mixi とはどんなものであるのか。利用することによって、人々にどのような心理的・身体的変化をもたらすのか。はたまた、mixi によって生まれた新たな相互コミュニケーションとはどのようなものなのだろうか。

mixi 登場当時、mixi という存在は安心の対象としてもはやされ普及した。第一に mixi は招待制で誰かからの招待がなければ、参加することは出来ない。第二に、設立当時の mixi は本名公開を推奨していた。当然、相互コミュニケーションネットワークであるから、検索に引っ掛からずに友達が見付からないなどの手間も省けるし、何よりも“みんなで信頼し合って本名公開で交流しましょう”という、根拠のない相互信頼論が広まっていた。

第三に、マイミクによる安心がある。mixi には、マイミクという中の友達を自分のマイページで登録するというシステムがある。マイミクにしか自分の日記やアルバムを公開出来ないように設定し、内輪的に楽しむことが出来ることが売りだ。つまり、自分の知らない異質な他者には自分の日記や個人情報を読まれることなく、友達や同僚、趣味の合う仲間同士での交流が出来る。プロフィールは公開になるが、ここには個人情報を出さずに、個人情報を公開している友人を自ら探す。mixi にはメッセという mixi サーバー上を介した簡易メッセージのやり取りも可能である。

ブログやネット、2ちゃんねる等と違い自分の日記や思想が誰に読まれているか分からないという心配もない。かつ、公開する友達もマイミクの中から更に選択することも可能で、誰に公開するか、そして後に言及する“あしあと”という制度の下、誰に読まれているかまで分かってしまう。

ネットという危険で得体の知れない巨大な世界の中で、安心して安住できる

地帯として、mixi は人々の間で広まり、一気に普及したと考えられる。身内で内輪の安心感について記述してきたが、これによって起こる弊害も後を絶たない。その一つに mixi 内におけるプライバシーの喪失がある。mixi には“あしあと”という制度がある。これは、誰が何時に自分の日記を見に来たか、そしてマイミクは何分以内にログインしているのかが一瞬にして分かる。

mixi には暗黙の了解として、マイミクの日記に“コメントしなければいけない”というルールが存在している。mixi には各個人が日記を書け、簡単にその読者がコメント出来る仕組みになっている。日記の公開範囲は書く人によって①全体に公開、②友人まで公開、③友人の友人まで公開、④〇〇まで公開等、選択式となる。ここで言う友人というのはマイミクをさし、〇〇というのは、そのグループを自分でメンバーを選んで指定公開が出来る。

友人の日記を読みに行った時（自分のマイページにてマイミクの最新日記の一覧が表示される）コメントせずに帰ったとしよう。そうした時に相手には「日記は読みに来たけどコメントはしなかったんだなあ」と、あしあと機能から確認される。

最近では、メールや電話が繋がらない時に、mixi のログイン時間から「mixi する時間はあるのに、どうしてあたしには連絡できないのかな？」と竹岡昭徳は前の彼女に責められたことがあるという。その上、自分と関わる女の子の mixi プロフィールページに行き、個人情報や日記による自分の彼氏とのやりとりのチェックをしていたという。こうなってくると、自由で安全な空間のはずの mixi 内のやり取りが、恒常的な監視下状態となる。尚且つ、相手が監視しているかどうかはこちら側からは分からない。だがそれを常に気にしないといけないという状態と化してしまうのである。これでは mixi がストレスの根源の元となり本末転倒である。

mixi の心地良さはみんなが肯定し、認め、褒め讃える関係性にあると考えられる。誰しもが自己肯定感を獲得しようとする。だが、必ずしも現実世界ではそうも上手く行く人ばかりではない。常に否定され続け、自信をなくしている人もいるだろう。そうした時に mixi でその愚痴を日記に書く。そうすると「私もそうだよ」「そんなのひどい」など共感のコメントが書き込まれ、決して否定はしない。

こうした温かいコメントが欲しい。その為にはどうするか。自分もその友達の日記に親身にこまめにコメントをする、ということである。ここで強調されるのはコメントの『返報性』である。お互いが“Give and Take”の関係で“人の振り見て我が振り見直せ”。自分がして欲しいことは他人にしてあげる、ということである。

これは現実世界ではなかなか難しい。面と向かっての関係は難しくても、顔が見えないネット上の関係ではそれが可能なのである。現実世界のように、相手の顔を伺いながら話す言葉の裏の心理を読み解き、それに応える形で自分も言葉で表現することが求められる。コミュニケーション上の対人言動への理解力、且つ、その分析結果をきちんと自分の言葉で表現する能力が必要となる。

しかし mixi 上ではそのような心理戦は臨まれていない。みんなが求めていることは『ただ肯定してもらおう』ということなのである。相手の気持ちになって、共感し肯定し褒め、感情に共感してそれを数行のコメントで表現すればいいだけである。時には、内容云々よりも“毎回コメントする”という行為自体だけで評価され関係が円滑に進むこともあるだろう。つまり mixi におけるコミュニケーション能力とは、お互いがお互いに科す『返報性』にいかにか円滑で切れ目なく連絡を絶つことなく続けられるかに掛かっているのである。

こうした状況下では『共依存』的に mixi 上でコミュニケーションをとり続けることになる。“マイミクの日記にコメントしなきゃ”“自分のとこにコメントきてるかな”“もしそうだったら返事返さなきゃ”と常に気にして生活しなければいけない。そうしていく内に、常に mixi がないと生活出来ない、mixi 中心の生活へと移行していく。

初めはこれが非常に楽しい。気になって気になって、楽しくて積極的に参加している。自分が日記を書いたりコミュニティに参加したり等はもちろん、また他人への“絡み”も積極的に行う。そして、相手が自分への返答をしてくれたかを確認しに行く。

だがこれを繰り返しているうちに、mixi に時間を費やし mixi にのまれている自分の存在というものを実感するようになる。今まであんなに楽しかった他との関わりも義務的に感じてくる。そうして mixi をやり終わり携帯を閉じた自分の“時間を無駄に使ってしまったような空虚感”に襲われるようになる。

そう感じながらも mixi をやめられない自分、無意識にアクセスしてしまっている自分、自分を自分でコントロール出来ない自分にイライラし始める。そして自己肯定感が失われていく。

人には“人から認められたい、褒められたい”という慈愛願望欲求がある。この欲求は他者からの評価によって得られる。自分で自己を肯定する自己信頼欲求、他者を愛することで自分の願望が満たされる慈愛欲求もあるが、一般的には慈愛願望欲求が強い人が殆どである。こうなると他者から認められないと、自分に自信が持てずに自己肯定感が満たされない。日々の日常において、他人からの評価で自分の価値を判断する人は、常に周りの目を気にし、非常に疲れやすくなってしまう。

慈愛願望欲求は自己でどうにかすることが出来るものではない。なぜなら他者が判断し結論を下すものであるからだ。だが、この現実世界ではなかなか得にくい慈愛願望欲求を満たす仕組みが mixi にはある。

ここでは、仲の良い友人に対して、自分が認め肯定することによって同様の効果が得られる。無条件に自分を認めてくれる友人の溜まり場でコミュニケーションの場が mixi のサイト上なのである。現実世界に疲れた人々が“帰ってくる”のである。その時に温かい仲間が迎えてくれる。そうして自己肯定感を回復・確立し、また辛く厳しい世界に出掛けていくのである。甘えの連鎖が起こり、ぬるい世界で刺激はない。ここに集うものが求めているのは無条件の肯定なのだから。

だが、確立した自己肯定感が崩れる危険性が潜んでいる。それは mixi に支配され空虚感を感じた時に、その自分の感情とは裏腹に自己をコントロール出来ないという点にある。そうして自分のこともコントロール出来ないのか、と自信をなくし一度は他者によって確立した自己肯定感が、ここにきてまた崩壊する。自己肯定感を感じる為、積極的に参加したはずが、これでは本末転倒である。

当然、このように感じなければ起こらない問題なのだが、気付かずネットにのめり込んでしまったが故に、重度のひきこもりやネット廃人になってしまい、現実世界への復帰が困難、という状況にもなり得る。人によって不快感の程度は違えども、やはりこの独特の“空虚感”を感じてしまう人が大半だろう。

コメントや周りからの反応をもらう為に人々は日記を書く。その内容は日常的な普段の悩みから、時には深い自分の心の内面の開示に至る。その一方で、mixi の日記を書く為の情報収集を始めるようになる。Web1.0の時代における情報収集は、自分の興味のある情報ページへのアクセスから情報を得ていた。そうしてまた興味を持った事柄にはまた情報検索し、アクセスを繰り返しネットサーフィンを行っていった。だが Web1.5の時代には「ググる」という言葉で代表されるように、自分で検索せずとも単語を一つ入力すれば関連ワードが出て来るようになった。ユーザーは自分で考えることなく、検索結果に表示されたものを上から順に読んでいけば良いだけになった。これまた有用性のあるものから順に表示されるときたからには、ユーザーは与えられるままに情報を受け取ることになる。

Web2.0の世界ではどう変化したのか。私達の情報源の主は、自分の周りのネット上の人々。つまり mixi 等、SNS で繋がった人からの日記からでしか情報を得ないという現象が起きている。自分で検索することもなく、自分の友達の情報を情報として受容してしまうのである。そして自分が知らなかった最新の情報に関しては“えーそんなこと知らなかったよ”“タメになったーありがとう”等の称賛のコメントを残す。

ニュースに関する日記は、全体公開にする人が多い。そこでの自分の分析・見解に自分の知らない不特定多数の人が反応する。まるで自分が情報発信者の気分に陥る。そうすると知らない人も自分の日記に足を運んでくるようになる。その期待に応えようと、“mixi で日記を書く為に調べるようになる”——これが冒頭に述べた mixi の日記を書く為の情報収集へと繋がる。

このような人がいると、他のそうではないユーザーはここから情報を得ることに終始する。つまり、mixi 内から出ることをしなくなる。近年、TV、新聞、雑誌等の従来の情報メディアの不振が際立っている。人々の意識として、ネット中心の情報収集傾向にシフトし情報を集める。だがそのさらなる段階は自分の内輪からの、情報収集である。

メディアリテラシーという言葉が叫ばれるように、情報が正しいかどうかの選択を自ら行いその責任は自分で負うのが一般的な考え方である。TV、新聞、雑誌等の情報も全て受容するものだが正しいと思い込んではいけない、といわ

れる。そうした情報を見て、各個人がネットやブログ等その詳細をより正確に、時には自分の見解を含めながら自由に記述する。これらの個人サイトから情報を得る人々が現れる。そしてこの情報をもとに、自分の身内日記、たとえば mixi 日記等で書く。その友人からの日記しか見ないという人々も現れる。これだけ多くの人を介在し記述されていくと、時には本来の事件や趣旨から外れることもあるだろう。

そもそもは発信源のメディアですら当てにならないといわれているのに、こうやって書かれた情報をだけで満足してしまうのは人々の思考力、及び語彙力すら低下させてしまう。難しい内容のものは、簡単な言葉簡単な言葉へとシフトしていく。それを見てまた簡単に記述……を繰り返していくと、記述する側も陳腐な薄っぺらい表現方法へとシフトする。

4. 親密性の深まり

竹岡昭徳の mixi 歴は、mixi 登場時とはほぼ一致する。竹岡昭徳は、対象とするコミュニティ中で、一番社交的で mixi を楽しみながら、広く利用している。また、竹岡自身もオフ会中心のコミュニティの管理者としてコミュニティの運営にも携わる立場にいる。そうした中でも問題や事件は絶えないという。

人と人の直接会うという場。初めはネット上のヴァーチャルの世界に移行する時の、危険性や実感として感じた思い等をこと細か語ってもらった。今同棲1年5ヶ月になる婚約者とは mixi を経由して出会い、自分の主催したオフ会を通して直接対面し婚約にまで至った。mixi を経由して出会った人数は数え切れない。問題も多様である。

デメリットはネットだと顔が分からないことじゃん。お互い顔を知らないまま出会う。出会いは顔を知らないことが9割くらいかな。うちらはそれで出会った。あとは会って顔を見て。会って初めて顔を見て。写メの交換はなかったよ。それでみんなでカラオケに行こうってことになって、車で迎えに行って。電話で「ああ、今ここにいるよ」みたいな。一対一ではないけど、ホントの出会いに関しては一対一。駅前で、っていう一瞬だけね。ネットで出会って付き合う付き合わないってねー。むしろ、この出会

いもそうじゃん。

このカップルに関しては写メールやプリクラ画像の交換はなかったが、この例は意外と少ない。今回に関しては、竹岡昭徳がそう切り出さなかった為だと考えられる。かつ、同じ趣味のコミュニティで出会い、趣味が合ったこと、カラオケに行くという共通の目的があったこと、mixi での出会いからオフ会までの期間が比較的短かったこと等が考えられる。つまり、恋愛としての出会い目的ではなかった、という点が一番大きいポイントであるように思う。ここで、出会いに対する男側の視点についても聴いてみた。

早乙女を引いたってのは嫌じゃん。その子が mixi の日記やプロフとか他の人のコメントを見て、まず 1) 歌がうまい 2) 大塚愛に似てる 3) 可愛い、三つ並べたやん。期待するじゃん。どんだけ歌うまいんだ一って。期待膨ら増しまくりに会ってみたら、あれ一違うじゃん。ホント外れで。全員お世辞かよ一ってなる。これは確実に言えることは、女が女にいう可愛いのは9割は信用しちゃいけないってこと。男が女に書いてる可愛いのは内の半分までしか信用できない。

ここで先ほど述べた写メール等の交換に繋がる。mixi 上でのやりとり、その上でのメールのやり取り、電話等、相手と実際に会うことまでにこぎつけるには、ある程度の時間と労力は必要不可欠。自分の好きな芸能人に似ているらしいから、と一生懸命時間を割きやり取りをし、会って見たら……あれっ？俺の時間をかえせー！という自体は珍しくない。

人は自分の労力や努力に対する対価を求める。そしてここに“時間”も加わる。費やしたものに対する対価がここでいう“理想の相手像”であり、これが満たされれば満足するのだが、そうでない場合が非常に多い。そうした時の為に、初めから“顔”を確認しておくのである。顔が全てではない、と主張する人は多いかもしれないが、ネットの世界では残念ながら顔重視社会が当たり前となっている。

つまり、自分が時間や労力を費やすビジュアルの持ち主かどうか、特に男性

側から女性に対してのシビアな選定が行われるのである。これは一般的に、初めて出会った時には“男性側が奢る”という暗黙の了解、またプライドから生まれる行いによる。実際に会うとなると金銭面の問題も発生することから、こうした状況は仕方ないのかもしれない。

そう思うと以上の選定感覚の男性に会う時に女性は、多少の警戒心は必要である。一度奢ってもらおうと、女性側には奢ってもらったという一種の負い目が生まれる。1) 早い段階から写メールを欲しがる 2) その上ですぐに会いたがる 3) 会った時に頑なに奢ろうとする。さらにこの男女間の上に、年齢差や立場差がある場合には尚更である。では、ここでは出会う前提の話をしてきたが、会うのに抵抗のある人、そうじゃない人が当然のようにいる。一体その差はどこから生まれるのだろうか。

ネットの普及率と一緒に。ネットがいくら普及してると言っても。携帯の普及率と一緒に、携帯でネットしてる人のも入って合わさった統計だから、すごい普及しているように感じるだけ。ユーザーの数が増えるから、そう見える。でも実際の見れるサイトなんて限られているから意味のないこともある。本当の悪い意味での出会い系サイトのほうは、携帯使っていることが殆どだから、そこは何とも言えないんだけど。mixiは出会い系サイトだと思っている人もいるでしょう。うちの友達でも「セフレになりませんか」って平気でメッセ送る奴いるし。

出会いの機会に格差が生まれている。出会いが多様化することによって、ネットを通した出会いを利用できる人出来ない人に格差が生まれ完全に二極化する。出会いデイトに関しては、“ネット利用のためのツールや知識の有無”と“ネットを通して出会うことによる心理的抵抗感の所在”の二つに分類される。現在のネットの普及率を加味すると、前者よりも後者に対する比重が大きいだろう。

より直接的に、調査者は、mixiの出会い系サイト、特にアダルト系の出会い系サイトの側面を感じる経験に遭遇した。ある日「僕は芸能関係の仕事をしている者です。ちょうど今、外回りで都内A大学の側まで来たので寄ってみま

122 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

した。今A大学の校舎内にいます！もし良かったら、学校内でHしませんか？なかなか上手いと思いますよ。お返事待っています～」という内容のメッセージがmixiを通じて届いた。

mixiのプロフィール検索で大学名と女性等のキーワードを入力し、都内私立大の女子学生に、片っ端からメッセージを同時送信したものであった。

いきなり「セフレになりませんか」というメッセは少ないにしろ、「友達になりませんか」とメッセをしてきて、プロフィールを見てみると「セフレ募集」と書いている場合が多い。そういう人は全体の比率からしたら少数派であるかもしれないが、一人に引っかけたら深い傷も負いかねない。そうした女性に対する警戒についても以下論が続く。

女性の方が危険性は高いかもしれないけど、まあ相手みて見極めればそんな危険もないでしょう。偽装してたり、嘘言ったりしてることもあるし。自分の働いている場所を詐称する人とか、自分の学歴を詐称する人とかネットでは当たり前だからね。だってさ、mixiで自分と同じ大学や高校卒です、って書かれて誰が嘘だと思うんだよ。実際に自分の年齢の詐称も、学歴の詐称もしてきた人は案外見てきたからね。たとえば、年齢詐称してた長岡紗季がいるからね。イベントに参加してる女の子の年齢をバーっと見てみると、一番高いのでギリで29なんだよね。引け目感じちゃうんだよね。一目見て26、27以上だなんて分かったよ。21とか自分で言っても肌見た瞬間にバレる。逆に隠してると、“こいつ年増なのに気にしてんだー”ってなっちゃって逆にマイナスになっちゃうんじゃないかって心配になるんだよね。会った時にどうこうじゃなくて、隠してるキャラクターって分かった時に“イタイ”っていうか。それで呆れてた人もいたよ。一度長岡紗季と年齢の話が2、3回出て、酒飲みながら話初めに年齢聞いたら長岡紗季が答えなかったらしいんよ。で、カラオケして、付き合いも短くないんだらいい加減に隠すの止めようよ、って言ったらしいけど結局年齢は言わなかったんよね。で、空気読めよみたいな。いっそのこと嘘付くなら突き通しちゃえばいいと思うんだけどね。

実際イベントにいた長岡紗季と調査者は、同世代である。読んでいる雑誌はSEVENTEEN、着ている服装は中学生・高校生ブランドであった。どちらかと言えば中学生ブランドのものが多かった。髪型も頭のとっぺんでハーフアップにする“ちょんまげヘア”で、メールの感じも平仮名ばかりで中学生とメールをしている感覚。語彙力もあまりないので、基本的に難しい話はしない。

長岡紗季は21歳や19歳と自称していたが、実年齢は今年32歳。このことは誰もが想像しなかった。確かに肌の調子等を見ると年上なことは想像出来るが、まさかここまで年上だとは。少し若くいたいからと、2、3歳のサバをよむこととは訳が違う。

つまり mixi を通じて自分の関わりのない赤の他人と一から知り合うことで「21歳ないし19歳の自分になりきる」のだと感じた。自分の趣味とは関係なしに、自分の年齢と共に、それに応じたビジュアル・言動に適応していかなければいけない。それは年齢、という問題さえクリアできれば解決する。長岡紗季に関しては意図的に他人を騙す為の年齢詐称ではなく、こうでありたい、という自分の感情に従ったプロフィール設定である。

竹岡昭徳も言っているように、この年齢操作を意図的に行っている人もいる。男女関係なく、相手に好意を持ってもらえるように、自称年齢をかなり低く設定する者もいる。厄介なのは、特定の相手の警戒心を解く為にその度に年齢を同年にする人である。同年という根拠のない共通点で、人は安心し親近感を持つ。

年齢・学歴・職場、どこまでが本当でどこからが嘘なのかは、他人からは分からない。時には長岡紗季のように、自分でも区別が付かなくなっている人もいる。そもそもこういったネットの出会いで平気で来る人、に対する信頼というものはどうなのだろうか。（自分もそうだということは棚に上げて）感覚で言うと、異性と知り合いたいから合コンに行ったが、合コンに来るような人は信頼出来ない、という理論である。個々の感覚的なものに依拠するが、この点にも聴いてみた。

初めから男がナンパ目的で来るならダメだろうね。そもそも男ってのはネットとか見てると分かるけど、そういった目的の人ばかりだからね。し

かもすぐに“個人的なやりとりをしよう”とする。ただそれで上手くいっちゃう場合もあるし、それに乗る女がいるっていう現状も間違いない。出会いで一番安全な手段は“集団で会うこと”。個人間のやり取りに関しては、本当に趣味が合うかどうかには掛ってるかな。趣味が合いさえすれば、ある程度まではどうにかなるからね。そしてネットとリアルでの決定的な違いは、会話が続くかどうか。実際に会ってみたら、やっぱり会話続かねーみたいだね。

この点においては、一般的にリードする側の男性によるという。ネット上のナンパでは相手の表情も分からない、そしてコピー＆ペーストで一度に何人も、同じメッセージを送ることが出来る。その為、路上等の実際に会って行くナンパに比べて、失敗した時の自分のショック度は限りなく低い。直接のナンパに関しては、顔が分からないというデメリットが初めから一つ消える点では良いのかもしれないが。

そして個人的なやりとりの要求をメールでおくる。そして会うことを要求するようになる。この際に、共通の趣味の集団のオフ会で集団で会うことを提案する。それを拒否するような人物には注意が必要となる。結局は会って見ないと分からないという結論に終着する。ではどうしてメールだけではお互いのことが分かり切れないのだろうか。

メールは言いたいことの半分しか伝わらない。一つ目に、メールは相手と言いたいことだろうと自分が勝手に解釈していることと、二つ目に、言いたいことをきっちり文章にまとめ上げられないこと。全てを考えて、伝えられることは半分以下だって言われているのね。実際メールのやり取りってのは、人間関係を作る上でマイナスになりにくいのは確かだけど“希薄”になりやすいことはものすごくある。やり取りが出来ることはプラスなんだけど、お互いの理解度とかを深める為には、ベストなツールではない。

メールは相手の表情が、見えない。mix のやり取りはメールや日記へのコメ

ントが中心。これらは実際に相手から発信された後に、タイムログがある。つまり、自分なりに考える時間というものがあるの返報性であり、必ずしも反射的な反応ではない。それなら相手が喜びそうなことを考える時間がある。自分の興味のない話題であったとしても調べ、いかにも知っていたかのように語ることが出来る。感情として嫌でキレていても、時間をおいて落ちついた大人の対応が出来る。

絵文字を使って笑っていたとしても、実際には激怒しているかもしれない、号泣しているかもしれない。それらは無機質な文字からは一切測れない。このようなメールというツールを使ったコミュニケーションが続くからといって、それが実際に会った時も同じだと言える保証があるのだろうか。答えは、否である。現実にも、メールは楽しく続くんだけど、電話になると無言になってしまったり盛り上がらない。というカップルや友達関係も珍しくない。希薄なコミュニケーションからは、希薄な人間関係しか生まれない。

では、こうしたメールやネット上でのやり取りから出会うところまで行くとした時の注意点はなんののだろうか。そして、婚約するまでに至った竹岡昭徳の経験を基に、付き合えるか付き合えないかという初めの判断はどのようにしたのか尋ねてみた。

すごく簡単な基準なんだけど、お酒抜き。アトラクションとかも抜き。特に何もない喫茶店とかに入って、二時間、いかに会話が途切れないかをチェックすると、すごくよく分かる。そこで“付き合えるか付き合えないかの判断をする”。二時間途切れないってことは、自分の経験上、四時間途切れないってことなんだよ。でも、二時間が続かないなら、長くは続かないんだよ。

竹岡昭徳はこの基準で判断したらしいが、このお酒抜きという基準は確実。アルコールが入ると思考力は低下し、人によってはリラックスし開放的になる場合もある。そして何か事件が起こった時には「酔っていて何も覚えていない」と、決まり文句の言い訳が出てくる。落ち着いて相手を知ろうとするなら、初対面からのアルコールは宜しくないだろう。実際、今回関わったイベント内で

もアルコール絡みの問題も起こっている。

心が弱ってたのもあるし、相手が社会的立場の高い職業の人だったから安心してたのかな。家も近かったし、相手の家で飲んだんだ。あたしは確かに酔っていたけど記憶がなくなるほどの酔い方はしたことがないし、そこまで飲んでなかった。宅飲みしてて記憶がなくなって……起きて気付いた時には「過ち」がおきてた。しかも、あたしと同じようにその人と宅飲みした、って子に後から聴いてみたら、あたしと全く同じこと言ってた。もしかしたら、トイレとか行った時に、なんか薬とか入れられたのかも。でも、あたしもその子も酔ってたし、その証拠がない。下手なこと言って相手を敵に回すのは怖いし、だったらもう関わらずに忘れたい。全部なかったことにして忘れたい。思い出すのも嫌だ。だから、自分の周りの子には同じ目にあって欲しくない。

このように答えた本人は、相手のことを何も知らなかったという。メールや電話を通してのコミュニケーションが基本で、何度か集団で会った程度である。なんとなく知ったつもりでいた相手、を勝手に信頼していた。だから自宅で飲み会をする機会に大して抵抗を感じなかったという。いきなり「自宅で宅飲みしようよ」といわれたら当然のように女の子は断るだろう。何かあったら自己責任、という感覚は当然のように発生するであろうし、そんなことを言ってくる人を信頼もしない。

希薄で表面的なコミュニケーションの蓄積で、いつのまにか相手を信用するようになっている。いつも日記にコメントくれるから良い人かも、メールの感じで気が合うかも。初めは当たり前のようにあった警戒心がいつの間にか薄れていく。そして、結果として素性も知らない相手と個人的な接触を持つようになる。このことは、無意識の内に相手に刷り込み慣れさせる、一種のマインドコントロール的な要素がある。

「良い人だと思ったのに騙された」という言葉は、一見相手に全ての責任を転嫁しているように思えるが、結局は自分の警戒心のなさを露呈しているに過ぎない。大切なことは、どんな状況下でも一歩自分を引いて俯瞰的に自分を再

認識することである。そして、自分が思い込んでいることは“事実”なのか“憶測”なのかを判断すること。そして、行動を起こすからには、自らの行動に責任を持つということである。

どこまでいっても何が本当かは分からない。ある一定のラインで妥協し、自分の中で「信頼するに値する人」と認識するのである。もしかしたら、今起きている現実の全てが騙し合いなのかも知れない。そうした心理戦の中、ネットを利用し自己の欲望を満たす人も出てくるだろう。“ある意味”、ネット恋愛に向いている人について議論してみた。

女性の一部はさ、相手が1000万程度の年収があって、自分は専業主婦になっても良いと言う条件付きであれば相手の男がどんな“もの”であっても良いって言うかそういう打算性のある女もいるわけで。結婚に重きを置いてなくて、人生の踏み台にしか思わない。それで得たお金を持って自分の人生を歩むこと、あと浮気も前提って言う頭をもった、ある意味シビアナ人もいるわけでしょ。すごい打算的だけでも、顔が少々不細工でも、1000万稼げるだけの仕事が出来、それなりの学歴も持っている、そうになった時に100%とまではいかなくともそれなりの頭脳を持った子供が生まれることも安易に計算出来る訳で。そう、つまり子供にそれなりの頭脳と金を与えられる条件が揃っているなら、ああ、いいじゃん。ってなる人もいるってこと。後は私の人生楽しめばいいし、って、すさまじい打算さを持った人もいるってこと。こういう人の方がネット恋愛に向いているんじゃない？まあ見合いでも良いんだけどさ、スペックさえ良ければ良いじゃん？だからその部分、顔見なくても趣味が合わなくても良いっていう点でね。

このように考えている女性たちも少なくない。晩婚化が進み結婚出来ない男が増えている。「婚活」という言葉が飛び交う。今までの理想の年収よりも、女性が男性に求める額は、不景気という現状も相まって低下する傾向にある。自分の理想のビジュアル・年収・学歴の人と恋愛結婚、などと夢見る女性は減っている。女性の社会進出も進み、現実を目の当たりにする機会も増えた。

128 法政大学キャリアデザイン学部紀要第10号

どこかで妥協しなければ、いつまで経っても結婚出来ない。そして、理想を言える自分なのか、という問いも自然と生まれてくる。

結婚は妥協という考え方は今に始まったことではない。そもそも妥協なしでの結婚など綺麗事以外の何物でもない。誰もが自分の好みの芸能人と結婚出来るはずがなし、出来たとしても趣味が合い順風満帆な夫婦生活が死ぬまで続くか、と誰しもが疑問を抱くであろう。

お互い①理想の姿の相手と現実の相手、②相手の理想の姿の自分と現実の自分がある。これが完全に一致するはずがない。当然自分自身のみに限っても、理想の自分と現実の自分のギャップと捉えたと認識しやすい。この際、妥協した上でギャップを埋める為には、1) 自分が理想に近づく努力をする(婚姻関係に関しては相手の理想に自分が近づく努力をする) 2) 理想を現実に近い付ける。この二点のみである。この努力を継続しながら、お互い適応していこうとするのが従来の“妥協”であった。

現代の“妥協”はその様態を変容してしまった。お金さえあればいい、子供に良い遺伝子が継げればいい。自分は自分で好き勝手楽しむの、だから“妥協”して結婚するのよ、という感覚。この意味での妥協には、お互いの歩み寄りは一切含まれない。手段としての結婚なのである。むしろ、歩み寄らないという割り切りこそが“妥協”と呼んでいる正体なのかもしれない。

5. 結語：出会いの機会と空間

ネットで形成されるコミュニティは、互いの顔のみえる face to face のコミュニケーションではなくて、顔の見えないヴァーチャルなコミュニケーションを基軸にしている。通常のコミュニティが、face to face での出会い、関心と興味の共有などの時間と空間の物質的な共在経験を経て醸成されていくのに対して、オフ会は、まず関心や興味などをインターネット空間上で共有する経験を経てやりとりがなされ、その後、現実的な共在関係へと転換していく。それゆえに、オフ会はあくまでもオンラインコミュニティの延長線上に位置し、ネット上の日常的なやりとりも重視される。

本調査では、調査者自身が、このコミュニティに一時期没入していった。調査を1年5ヶ月ほど経過した頃、調査者自身「Bookmark から mixi にいくの

が一連の動作として染み付いて無意識でアクセスしてしまう、そんな自分が嫌だ。mixi 依存症のせいで携帯依存症。無意識の内に、ネット世界が私自身にも浸透し、浸食し“ないと不安”という不安要素にすんなった。この変化は全く気付かない内にじわじわ起こる。気付いた時にはもうある種の mixi 病にかかっている」と述べた。

本論文で行ってきたような、ある集団やコミュニティの活動に継続的に参与するフィールドワークは、集団内の内的世界を描くのに適している。調査地に行き、調査に取り組む行為と、調査地から戻り、分析や執筆する行為は、物理的にも認識論的にも切り離されてきた。オンラインはその距離をオンにする。いわば、調査する行為を常態的なものにする。それは、調査を継続的に行うことを可能にするものであると同時に、調査者もそのコミュニティの中につねに存在し続ける。いわば、文化人類学者のフィールドワークが、調査地の居住空間に移り住み込むことでおこなわれてきたように、オンラインコミュニティのフィールドワークとは、調査地のヴァーチャル空間に移り住むことを意味しているのである。この点は、フィールドワークの方法論に関する認識論的転換として、稿を改めて論じることにはしたい。

出会いの機会は、その自由度をますます高めている。趣味や関心を共有するものであれば、居住地や社会的属性等に関係なく、オンライン上で出会うことができる。オンライン上でやりとりが交わされ、何らかの機会に、顔の見える関係となる。顔のみえない関係が顔の見える関係となるとき、コミュニケーションの作法はどのように変化するのか、あるいは、コミュニティへの没入の程度にどのようなインパクトをあたえることになるのか。オフ会がもたらすコミュニティの広がりリスクを同時に抽出しながら、現代社会におけるコミュニケーションの変容を丹念においにかけていくことが求められている。

ABSTRACT

The Social Meaning of an Online Community

Kennosuke TANAKA

Informational communicative technologies and social networking service based on the Internet have enabled the emergence of new sorts of communities and communicative practices of everyday life. This article addresses the phenomenon of Internet-based group, generally referred to as online community. Analyzed through the lens of contemporary approach by an intensive fieldwork, online community study would contribute to debates in the literature which seeks to the epistemological positionality of researcher different from the qualitative method about the face-to-face groupings traditionally thought of as communities.